
神様の頂点～創造主になってしまった少年～

りょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の頂点〜創造主になってしまった少年〜

【Nコード】

N0589M

【作者名】

りょう

【あらすじ】

何故か死んでしまった 後藤 優（ごとう ゆう）は、力を秘めていた為、神の頂点 創造主 にならなくてはいけなくなった・・・

世界を作って、いろいろやってしまいます。

漫画の力でも何でも出来てしまう主人公です。

1話

俺は死んでしまったらしい。

俺も何で死んでしまったか分からない。

後藤 優 として生まれて16年充実していて平凡な人生だったと思う。

まあ、この容姿でいろいろ有ったが・・・変な女にストーカーされたり（告白できずに影から見ていただけ）喧嘩吹っかけられたり

（逆恨み）は、したが自分なりに充実していたと思う。

なのに何故??????????

「ココはどこだ？」

ただ真っ白い空間・・・

「学校から帰っていつも通りに過ごし、就寝しただけ、こんなところには、居なかったはずだ。」

???「ここは、神の生まれる空間です。」

2話

いきなり声が聞こえてきた。

声のするほうに振り向いてみると、そこには男が1人立っていた。

「ここが神の生まれるところだ？じゃあ俺は何故ココにいる。」

「???」それは、お前の生まれ持った力が強すぎて、力が覚醒したと同時に

死んでしまったんだ。そして、力が強いお前は、神になるためにココに

うまれてきたのだ。」

じゃあ、俺は死んだと言うことか……

「???」「そうだ。」

「???俺の考えたことをよんだ？」

「???」当たり前だ。俺は神　ゼウスだからな。」

「マジで？」

ゼウス「おう！しかしお前はすごい力持ってるな。」

「?????すごい力？」

3話 頂点になってしまった（＾3＾）エへ

――――ゼウス視点――――

ココまで力が強いとは、思わなかった。

全ての神を合わせても勝てなだらうな・・・

――――

ゼウス「そうだ、ユウはかなり強い力があるのだ。本来なら初めから

6

神、いや・・・創造主、神の頂点に立つはずであったのだが、

何故か、人間として生まれてしまった・・・・・・・・

人間として創造主の魂は、人間の肉体には強すぎたのだ・・・

だから、死を迎えたのだ。」

じゃあ・・・俺が死んだのは、仕方がなかったんだな・・・

「じゃあ。これから俺はどうしたら良いんだ？人間としての肉体もない。」

それに神の力も使い方が分からない・・・いくと来ないぞ。」

ゼウス「大丈夫だぞ！お前には、本来なってもらはずだった創造主になってもらう。」

扱う力の使い方も、俺がお前に教える。」

「まじで?。」

ゼウス「オウ！創造主になると云う事は神の頂点に立つのだ。」

俺の上司になるのだぞ。」

ゼウスの上司か・・・なんか不思議な感覚だな。まあ、俺の魂の力とやらは、

チートなんだろう。やることもないし・・・やってみるか（＾3＾）

ゼウス「ユウの考えも纏まったみたいだし、力の使い方でも教えるか（＾0＾）」

「よろしく頼むぜ、ゼウス」

ゼウス「おう」

4話 進み早くねえ?? (>x<・)

あれから大変だった・・・

創造主の力は、頭に思い浮かべたり、世界を作り生き物の種を作り

どの様に進化させるか、創造・・・思い浮かべていかなくては、

ならない。

コントロールするのに1年ほど使った。

ゼウス「・・・お前・・・1年で神の力のコントロールするなんて・・・」

「????????」

ゼウス「普通、1000年ぐらい掛かるもんだぞ!」

「!!!!・・・マジで?」

ゼウス「・・・・・・・・・・・まあ・・・いい。これから創造主の間に
行ってもらい

世界を作ってもらう。前の創造主が死んでしまってから50
000年は

世界が作られてなくて、神達が暇していたのだ。みんな力ナ
リお前が作る

世界を楽しみにしているぞ
」

・・・創造主って死ぬのか?????

「なあ・・・ゼウスなんで前の創造主は死んだんだ?????????

神ってそんなに簡単に死んでしまうのか?????」

ゼウス「・・・前の創造主は、全ての自分が作った世界を壊そうと

したのだ・・・」

「っな！！何で世界を壊そうとしたんだ？？？自分の作った世界なら自分の子供だろ。」

ゼウス「それが・・・自分が寝てる間に神の信仰が無くなった世界があつたんだ・・・」

それを起きた時知った、前の創造主は・・・全てを壊そうとしたんだ。」

「そんなの自分勝手極まりないじゃないか！」

ゼウス「あああ・・・だから全ての神で創造主をころしたのだ・・・」

「まあ・・・そんな理由なら仕方がないな・・・その創造主が滅ぼそうとした

世界は、今はどうしているんだ???」

ゼウス「今でもあるぞ。ナギとか言う奴が創造主の力を殺いでくれたからな、

そのお陰で我々が創造主を倒せたんだがな。」

ナギ「・・・どこかで聞いたことあるぞ・・・!!!」

「その世界、ネギまじゃねか！漫画の世界もつくれるのか？」

ゼウス「オウ。作って大丈夫だぞ、それに・・・作った世界に行くことも可能だ。」

「よっしゃ！！じゃあ世界作りまくるぞ！」

「作った世界は神達が書類整理や異常が有った時は教えたくれるんだっただよな？」

ゼウス「オウ。そうだぞ！俺は、お前の秘書みたいなもんだな。」

「そうか（＾０＾）じゃあ、これからよろしくなゼウス」

ゼウス「おう」

5話 頑張って作っているぞ・・・しかし疲れた・・・

あれから、俺の部屋（創造主の間）に行き世界を作った・・・

マジで大変だった・・・星を作りそこに、水やマグマ火山に、太陽や月

を作った。

・そしてそこに微生物の種を植え付け、進化させ魚などを作った・・・

人間作るのに、時間が掛かるため世界の速度を速めたりした・・・
（反則だよな）

いろいろな漫画の世界を作ったりもした。

ナルト・ワンピース・悪魔を作ってるぜバブ・リリカルなのは・
などなど作った

ゼウスには、呆れられたが・・・日本人なら作るべきだろ！

後悔はしていない。自己満最高（＾３＾）v

・ 幾つかの世界を神達に、見守らせる段階で、困った事になった・・・

「ゼウス・・・それホント?????」

ゼウス「ああ・・・神達が世界の取り合いをしている・・・」

「う~~~~ん・・・なんでそうなるの??結構世界作ったよ??」

ゼウス「それがだな・・・神達は、日本人の創造力にビックリしてな・・・」

言いにくいんだが、漫画や小説・・・アニメを良く見るのだ・・・

そのせいで、誰がどの世界か喧嘩しているんだ。」

日本人のアニメや漫画は凄いもんな・・・俺も自分が好きだったしな・・・

「う~~~~~~~~ん・・・どうしたもんか・・・」

・・・好きに選ばせるから喧嘩になるんだろ・・・

「なあ・・・ゼウス・・・みんな集めることってできるか???」

ゼウス「出来るか???どうするんだ???」

「くじ引きで決めようかと・・・」

ゼウス「・・・そうするか・・・このままじゃあ、埒があかん・・・

「・

――クジ大会――

「え~~~~~。これから誰がどの世界を担当するかクジで決めた」と

「思います」

「「「「「は~~~~~いい「「「「「

良い返事なこと

「じゃあまず・・・これから1ずつ引いて貰います。その数字の番号順に

世界の玉を引いてもらいます。その世界が自分の担当する世界になります。」

「どんな順番になっても何処で自分がほしい世界が出るか分からないから

みんな平等です。これで文句は無いですね」

「「「「「は~~~~~い」「」「」「」

良い返事だ。一樣脅しておくか……

「もし……喧嘩なんかしたら……分かっているよね」

（（ブルブル）（（「「「「「はい「「「「「

そうして決まった。

6話（前書き）

神様たちの名前が思いつかない・・・

てか・・・わかんない（>・<・;）

誰か教えて・・・そのうち番外編で誰がどの世界か書きます。

6話

あれから500年ほどたった。

「なあ・・・ゼウス」

ゼウス「なんだ？何か悩み事か？」

「おれが作った世界順調にいつてるみたいじゃん・・・」

ゼウス「ああ。うまく言ってるな。それがどうした？」

深刻そうに言う・・・

「俺・・・初恋も、初恋人も・・・まだ、だったんだ。」

ゼウス「え????!!お前その顔でまだだったのか?????」

「ああ・・・やっぱり・・・恋人ほしい・・・」

だって、ホントほしい・・・寂しいじゃん。

ゼウス「じゃあ、100年ぐらい世界に行ってくるか」

「いいのか？」

ゼウス「おう！その代わり、みんなに理由とか言わないと行けないが・・・いいぞ」

それに、何か有ったら連絡するけど・・・」

「全然OK！」

彼女ゲットの為なら何だってするぜい~~~~~v

―――後日―――

ゼウス「……っと言っわけなんだ」

アテナ「ユウ君、彼女いなかったの？ てっきり 居るもんだと思
ってたから……」

「いなくて、悪かったな……（ふて腐れ）」

アテナ「違うわよ。からかっているんじゃないの……居ないと分
かっているなら」

わたしなんてどう？？？？？」

ゼウス・俺「はあ????????」

アテナ「だって、前から狙ってたのよ……だも、居ると思っ
たから……」

ゼウス・俺「……………」

「とりあえず……作った世界に行くてくるわ。それで、アテナの
ことも考えとく……」

アテナ「ホント???」

「おう」

アテナ「やった~~~~~」

ゼウス「考えるだけって言うだけだろ。」

「……………」

アテナ「分かってるわよ」

- - - - -
話した後――――

ゼウス「本当にアテナのこと考えとくのか？」

「そのつもりだけど？？？」

どうしたんだ？？？

ゼウス「アイツだけは、やめとけ……」

「????????????????」

「ゼウス……昔……アイツと付き合った人間が居たんだが……」

「そうなのか??それで??」

ゼウス「初めはうまくいった……でもある日男が仕事のこと

職場の女と話してるのを見て、嫉妬して凄かったんだ……

凄すぎてどういったらいいかわからない……

ただ言えることは、男が死ぬまで他の女とは話せなかった……

兄弟や子供、職場のものも全てだ……」

「……………」

それって……かなりやばくねえ？……

「とりあえず……考えるだけにしとく……」

ゼウス「そうしとけ……俺でもあの状態のアテナは、止めることができない……」

こうして、アテナのこととはなくなった。……

7話

どの世界がいいかな~~~~。

コンコン

ゼウス「ユウ入るぞ。」カチャ

ゼウス「…………ユウ何やっているんだ…………？」

何やってるか？だって…………どの世界に行こうか悩んでいる俺は、

今世界を水晶で覗いていた…………

「何って世界を覗いてた。何処行くか悩んでるんだよな…………」

ゼウス「だからって…………そこを覗く必要あるのか…………」

????男なら覗くべきだろ、男ならあそこを覗くことと、

透明人間になって色々やる事とか懂れるだろ！

ゼウス「まあ・・・確かに気持ちは分かるが・・・」

「まあ良いじゃないか」

ゼウス「はあ」

ゼウス「ところで、いい加減決めたのか？」

「う~~~~ん・・・・・・・・」

悩んでるんだよね・・・ネギまもいいし・・・リリカルもいい

・・・ワンピースも良い・・・・・・・・でもな~~~~

「前に、漫画とかの世界じゃないとこ作ってたじゃん。あそこにしよ

うかな〜。」

ゼウス「漫画じゃないのか？ユウは、神だから世界を無に返さない限り何しても

大丈夫でぞ？」

「漫画の世界は、いつでも行けるしな・・・それに、知らないほうが面白いし」

ゼウス「まあ、そうだな・・・」

ゼウス「そうそう。もし恋人が出来たらココに連れて来ても良いかな」

「????神様にでもなるのか？」

ゼウス「違う！死ぬまでは、あっちにの世界にいても構わないし

ココに連れて来ても良い。死んだ後もココにこれるように
神の伴侶

「 わできるんだ。・・・まあ真実の愛の場合のみだが・・・

「 そうか、じゃあといあえず・・・この世界にいつてくるわ

ゼウス「 オウ！分かったよ。良い子見つけて来いよ」

やっぱ、ゼウスは優しいな・・・さすが俺の親友

ゼウス「 まあ・・・付き合いも長いからな ・¥¥¥¥¥¥¥¥」

————— シュン……………

ゼウス視点

行っ
たか
．．．

「しかし．．．ユウこれ分かって行っ
たのか？．．．」

そう．．．ユウの行っ
た世界の書類にわ
．．．

世界名

アクア

世界に住む住人

魔王・悪魔・精霊・ウルフ・吸血鬼・魔獣・・・など

この世界の信仰の神

ユウ

「気づいてたら、アイツなら行かないな・・・しかもあっちの世界じゃ・・・」

アイツの顔もろバレだぞ・・・まあ・・・いいつか

ハーレムでも作るだろう。」

そうユウは、気づいていなかったのだ・・・

その世界では、ユウを信仰の神になっていた……しかも……

この世界を担当する神は、ユウを憧れ……この世界に肖像画まで

作って信仰を増やしていたのだ……

7話 どの世界がいろいろな~~~~~。
(後書き)

やっと、異世界に行きます。

時期をみて漫画の世界も書きます。

8話

とうとう、世界にきたよ……って何で森？

――ドスン――

「やつと着いたか……って何で泉？　しかも木しかないし……」

ホント……森しかないし。

「とりあえず、現在地と首都でも詮索するか……」

[illegible][illegible]

ココから二キロのところに、デカイ首都があるな・・・ってかこの泉って・・・神の降り立つ泉だと！

・・・取り合えず・・・スルーだな。

「ココにこのまま居ても埒あかないし・・・首都の方にも行くか。」

「――その頃、王都では・・・」

王「強い力を持つものが森にいるな・・・しかもこっちに向かって
ある・・・」

爺「どうされますか？」

王「目的が分からぬ．．．取り合えず町の警備を増やせ！」

爺「はあ！！」

侍女１「恐れ入ります。」

王「ミリーよ。どうした？」

ミリー「申し上げます。姫様が．．．また、城を抜け出されました。」

．．．．．わが娘ながら何とも御転婆．．．

王「わかった．．．兵士に伝えよう。」

ミリー「わかりました。失礼します。」

ふう・・・・・・・・

こんな時に、わが娘ときたら・・・・・・・・

頭を抱える王であつた・

――――姫視点――――

今日も城を抜け出てきた

「チヨロイ・・・・」ニヤリ

しかし・・・・暇だな~~~~・・・・

「よし町外れのあそこにも行って見ようかしら。」

あそこは、花が咲き乱れていて綺麗だから……

――その頃――

しかし、森しかないな……

「おっ！ やつと開けた場所に出たか……ココで休むか……うん？」

休もうとしていた時……なんか気配が近ずいてきた。

精霊か？

精霊　＜始めまして、創造主様我々はこの世界の精霊でございます。＞

「お前は、精霊王か……よく俺が創造主だと分かったな。」

精霊王　＜はい。この世界の管理をする神より、あなた様事は聞いております。＞

「そうか。これより100年ほどこの世界の世話になるからなよろしくな」

精霊王 <はい。ユウ様がこの世界に来てくださって嬉しいです。
>

「そうか。・・・ところでお前の名前は何だ？」

精霊王 <我々精霊には名前はありません。
>

「そうなのか？・・・じゃあ俺が付けてやるよ。」

精霊王 <ほんとでございますか？（嬉）
>

「おう。・・・じゃあ・・・ハクと名づけよう。」

ハク <ありがとうございます。>

「良いって。」「コで少し休ましてもらいな。」

ハク <はい！好きなだけいてください。>

「ありがとうな」

・
・
・
・
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
Z
・
・
・
・
・
・
・
・
・

9話 姫様と出会ってしまったよ……

――姫――

お気に入りの広場に來たのですが……

男の人が寝てます……どうしましょう(・・・)

取りあず……近づいてみますか……

――ユウ――

俺が気持ちよく寝ているのに誰か近づいて來たな……

まあ・・・殺気も出てないし・・・大丈夫だろ・・・ZZZZZ

――――姫――――

知らない男性に近づくのは、危険なのは分かっていますが・・・

「っな!!!!!!!!!!このお方は・・・・・・神・・・・」

――――ユウ――――

煩いな・・・気が散って寝れない・・・

起きるか・・・はあ 3・・・

ムク

「・・・ふあ・・・よく寝た・・・」

気配のほづを振り向いてみると・・・

身なりの綺麗な子だな・・・もしかして良いところの子か？

スタイルも良いし、顔もかわいいな・・・／／／

よし声でもかけるか・・・

「なあ？その子・・・」

姫「・・・・・・・・へ？・・・・・・・・」

「?????まあいいや、名前何て言うんだ・」

アリス「っえ・？・・・・ハセガワ・D・アリスでしゅ・・・・・・・・／／」

この子・・・・ドジツ子か？・・・・まあいいつか・・・・・・・・かわいいし・・・・

それにしても・・・・ハセガワって・・・・まあ俺が作った世界だから名前が

日本よりになるのは、いたし方ないか・・・・」

(ゼウス「声でてるぞ〜〜〜〜。」)

「ゼウスか？俺声出た？」「おう」……マジで……」

「アリス、やはり、神なのですね……伝承とおりのお姿なので……」

傳承？ ？ ？ ？ ？ ？

「伝承って何だ???」

アリス「神殿にあるあなたの肖像画です……」

• • • • •

•
•
•
•
•
•

「ななな．．．何だつて~~~~~!!!!!!」

「オイ。ゼウス．．．どうせ聞いてるんだろ?!」

—————シュ—————

ゼウス「呼んだか？」

「どうなってるんだ??? 何で俺の顔がばれている!」

ゼウス「．．．．．あまり．．言いたくないんだが．．」

ココを担当する神が．．お前のファンだ．．．．．。

「

ファン??????

ゼウス「お前・・・気づいてなかったのか??お前、神々に人気があって

ファンクラブがあるぞ・・・しかも、その会長は
アイツ

だぞ・・・」

アイツ?????

「まさか!」

ゼウス「・・・そのまさかだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ〓3・・・」

ココでの恋人探しは、あきらめるか・・・・・・・・

ゼウス「ココで、恋人探しなら・・・選びたい放題だぞ！」

「~~~~~ん・・・・・・・・」

どうするか・・・・・・・・

アリス「・・・・あの~~~~。・・・・・・・・」

・・・ん？

「何だ？」

アリス「恋人探しに来られてのですか？」

「そうだが？」

ゼウス「そうだぞ。コイツ仕事ばかりやってたから、今まで恋人が居なかったんだ。」

「居なくて悪かったな……………」

ゼウス「誰も、悪いなんて言っていないだろ。」

「取り合えず、アリスの事何も知らないから、アリスの事知ってから返事するな。」

アリス「では……うちに来て下さるのですね?!」

「ああ。世話になるな。」

ゼウス「では、俺は帰るからな。」

「おう!ごめんな、迷惑かけて……」

ゼウス「今まで、休まなかったんだから100年ぐらい大丈夫だ。」

まあ・・・何か有ったら書類持ってくるから。」

・・・書類・・・ゼウスやってよ・・・

ゼウス「・・・最高神のお前にしかできないだろ。・・・」

・・・そうだけども・・・

ゼウス「まあ・・・頑張れ。・・・」

「・・・おう・・・（泣）・・・」

ゼウス「じゃな・・・」

10話 みんな崇めたるし・・・（泣）

俺たちは、あれから2人で王都に行く道を歩いてる・・・

「・・・・・・・・・・」

アリス「・・・・・・・・／／／／・・・」

うう~~~~ん・・・

「そういえば、俺アリスに名前言ってなかったな。」

「俺の名前は、後藤 優 だ。ユウと呼んでくれ。」

アリス「ユウ様ですね。」

「様もいらないけど・・・まあいつか。」

「そういえば、アリスって城とか行ってたけど・・・良いとこの子？」

アリス「私は、この国 イタリアーナ 国の第一皇女です。」

・・・

「まじで？」

アリス「はい。」

「じゃあ、俺いてもいいのか？・・・だって怪しいだろ・・・」

アリス「大丈夫ですわ。ユウ様のお顔を知らない者などこの世界にはいませんから。」

．．．．．そんなに、俺の顔有名なのか．．．．．

アリス「着きましたわ。」

．．うん？．．．もう着いたのか？．．．

<<首都正門・検問所>>

兵士１「姫様探しました。力の強いものがこちらに向かっているの
で、早く城に

お帰りください。．．．．．！！．．．」

「姫様、このお方は？？？．．．まさか．．いや．．し
かし．．．」

-
-
-

•
•
•
L

ませんから

L

•
•
•
•
•
•
•
•
•

L

兵士1「・・・・・・・・・・神が下りられた・・・・神殿にお伝えなくてわ」

こうしてユウが世界に降り立ったことが、世界中に伝えられたのであった・・・・・・・・

11話 泣きたくなる。。

あれから・・・城前に来るまでの町での道のり・・・（泣）

なぜなら・・・

出会う人の反応・・・

俺の顔を見て、驚き泣き出すもの、ひれ伏す者・・・固まるもの・・・

泣きたくなってきた・・・（泣）

アリス「ユウ様、着きましたわ。」

・・・やっと・・・あの目線から逃れられる（泣）

「そうか・・・」

門番1「姫様、また抜け出して！城の警備兵が総出で探しているのですよ！」

門番2「・・・・・・・・あの〜〜〜〜・・・・・・・・姫様・・・このお方は・・・」

．．．！！！！．．．．．まさか．．．．．」

門番ズ「『『『まさか、神　ユウ様　！！！！』』』』」

．．．．．！！！！．．．．．

「まさか！アリス、俺の名前も有名だったりする？」

アリス「．．．．．言いくいのですが．．．はい。．．．」

．．．．．泣．．．．．

アリス「．．．．．ユウ様お気をたしかに．．．参りましょう。」

「そうだな・・・ココで考えていても仕方がないしな・・・アリスの父に会いに行くか」

アリス「そうです」

――ユウ達が去った門番達の会話――

門番1「すごかったな・・・」

門番2「そうだな・・・」

門番3「伝承通りのお顔で、美しいお顔だったな」

門番ズ「「「そうだな」」」。

門番4「ところで・・・ユウ様は何でこの国来たのかな？」

門番2「姫様と結婚するためとか？」

門番4「そうなのか？」

門番1「でもそうなら、この国の王族は、神の血を受け継ぐ事になるぞ・・・」

門番2345「・・・・・・・・・・・・・・・・」

門番ズ「「「それ、いいな!」「」」

門番4「じゃあ、姫様に頑張ってもらわなくてわ!」

門番2「そうだな・・・」

門番5「・・・メイド達にも協力してもらえば・・・」

門番ズ「「「それ良い考えだな!」「」」

こうして、城でのユウとアリスくっ付け作戦が発令されたのであった。

12話

王様？王妃？最強・・・？

今・・・俺は王の間にいる・・・しかも、何故か貴族やもろもろ居る・・・

俺見せ物・・・（泣）・・・

アリス「父上、ただいま戻りました。」

王「ふむ・・・無事でよかった。」

王妃「良くありません！　あなたも少しはしっかりして下さい！」

王「・・・すまん・・・」

王妃「ところで、あなたは？ 神の肖像画に瓜二つだけど……」

アリス「このお方は 神なので 「あなたは黙っていなさい」……
はい。……」

もしや……この国の最強は……王妃？……

「俺は、確かに神だな。」

――ザワ――――ザワ――――

???「神だと！」

????「本物か？」

????「神が この地に降り立たれたのか……」

結構いろいろ言ってくれてるな……

王妃「静まりなさい！」

シーーーーーー

やっぱり、この国最強は、王妃だな……王でなく王妃と話した方が良いな……

王妃「あなたが神だとして、何しにこの世界に降り立ったんですか？」

．．．．．言いたくないが．．．．．いわないとな．．．

「まあ．．．俺、神なんだが、まだ独り者でな、仕事のし過ぎで

恋人も居なかったんだ．．．まあ、早い話．．．言いたくないの
だが恋人もしくは、妻探しの旅

だな」

ざわ

ざわ

「?????何だと!ではわが娘と結婚してもらえば．．．神の血
が．．．うふふ．．．」

「??.?」うちの娘を・・・

「??.?」・・・むふう・・・

13話

どうして、こんな事になった・・・

始めは・・・ただ恋人がほしかったただけだ・・・

1時間前

王妃「ユウお前が、神だと言う証拠は何かあるか？」

証拠ね・・・

証拠と言われたので、

パン

「これでいいか？」

鋼の錬金の技・・・アレ良いよね

神になってすぐにヤツチャツタ

-
-
-
-
-
-
-

王妃「では、本当に嫁探しのだな？」

「まあ……」

王妃「そうか……じゃあ……うちの娘はどうだ??？」

[illegible][illegible]

14話 人生っていつも理不尽・・・（泣）

――アリス視点――

お母様が、私はどうかとユウ様に勧めていますわ。

ユウ様は、驚いているみたいですけど・・・うふっう

お母様が味方についてくれて、協力して下さるのだから・・・

ユウ様は私のものですわ

――アリスアウト――

「ちょっと！待って・・・いきなり・・・」

王妃「まあ・・・知り合っただばかりと言うし・・・この城に住み考えてやってくれないか？」

考えるのは、全然かまわないが・・・

「ココに残るのはかまわないが・・・アリスとの事は、どうか分からないがいいか？」

王妃「それで、いいです。」

王妃「それに・・・家臣の中にも娘をっと思っっているものもいるみたいだしな・・・」

別に、強制はしない。ココに好きなだけ留まり相手を見つけると良い。」

結構・・・王妃まともな人なんだな。

「じゃあ、そうするわあ」

王妃「では、これにて・・・」「ユウ 今いいか？」・・・」

この声は・・・

「なんだ、ゼウス」

シュン

ゼウス「おう！．．．ユウこの状態は．．．どうしたんだ？」

「この国の王族と知り合つてな．．．今 王妃と話していた。」

まあ．．．娘を嫁に進められたが．．．

ゼウス「．．．ご愁傷様．．．」

「．．．（泣）．．．」

．．．．．ところで何の用だ？？？．．．

ゼウス「おお．．．忘れるところだった！」

ゼウス「この世界の．．．．．長い説明中．．．．．
．．．なんだが。」

「ああ、この世界が、……う〜〜ん……」

取り合えず……

パン

机とイスを出して

「ゼウス、その資料をよこせ後世界の玉だ。」

……ただいま……世界作り中……

「……つと、これでいいか？」

ゼウス「おう。良いぞ。休暇中にすまん」

俺にしか出来ないから、仕方ないだろう・・・

ゼウス「・・・まあ・・・お前以外できないからな・・・出来たら変わってやるんだが・・・」

「仕方がないだろう、創造主になった時点であきらめたよ。」

ゼウス「そうか・・・そういえば、神達が人間では無く、神の中から選んで欲しいと

俺に言ってきたぞ・・・まあ、言って来た奴はお前のファンクラブの女ども

なんだがな」

「・・・お前ならあの中から選ぶか？」

ゼウス「・・・・・・・・すまん。」

「分かってくれれば良いんだ（泣）」

ゼウス「まあ、良い人見つけろよ」。また来るな」

「またな。」

シュン

・・・帰ったか・・・うん？・・・何か忘れているような・・・！

そうだった、ココは王の間だった！

「・・・ええゝゝと・・・その・・・何だ・・・そなたは、創造主だったのか・・・」

「へ？」

王妃「だから、ユウ殿は創造主なのか？」

・・・・・・さっきの会話駄々漏れ（>|<:;）・・・

「様そうだが・・・」

王妃「そうか・・・まあいい。ゆっくりこの城に滞在してくれ。」

「おう？ありがとう。・・・？？？」

王妃「では、この面会をおわる。」

15話 番外 王妃視点

ユウと言う少年を見て、正直泣きそうになった・・・

身体が心が全ての細胞が、この者が神だと認めている。

しかし、王である夫は頼りにならない・・・私がしっかりして質問しなければならぬ。

[illegible]

・ ・ ・ ・ ・ 話 1 話 であつたこと。 ・ ・ ・ ・ ・

嫁探しか……わが娘が、ユウ様に恋している目だ……

取り合えず、援護射撃でもしといてやったが。

ユウ様は、考えると言っただけだったが・・・

しかし・・・あの途中で現れた、ゼウスとか言った者との会話から
創造主

と言っ言葉が出たが・・・

ユウ様が創造主だとすると、神の世界のトップだと言っことになる。

王妃「はあ・・・」³

わが娘の初恋も前途多難だな・・・

王妃「しかし・・・貴族の奴らをどうしたものか・・・」

王「そうだな・・・」

あの面会が終わってから・・・貴族の者たちが煩かった。

仕方がないのかも知れないが・・・

王妃「奴らの考えてる事は、丸分かりだ。」

わが娘を神と結婚させ、わが血筋神の血をと企んでいる・・・

これだけならまだ良いが、国を我が物にと企んでいる奴も居てたちが悪い・・・

王「そうだな・・・ユウ様も大変だ。」

王妃「ユウ様は、きっと分かって居るのでしょうか」

これから、大変だ・・・

王妃「あなたももう少ししっかりして下さい！」

王「・・・はい・・・(泣)」

16話（前書き）

王妃が、上から目線です……とありましたが。

国では、王妃が一番強いです……いろんな意味で……

王が人に流されやすい分、王妃が家臣や貴族達をまとめてるので、上から目線でないと、なめられてしまうからです。

想いつくんですが、文章能力が低いのでうまくかけなくて（泣）

そのうちうまく書けるようになるといいな~~~~あ……

16話

王妃との面会が終わってから、（王はもうスルーっでいいよ。だって空気だし）

俺はあたえられた部屋にいった・・・が！

「なんで、アリスと部屋が繋がってるんだ・・・？」

アリス「／／／・・・お母様やみんながユウ様のことが好きなら
そうしろと・・・」

「・・・アリスは本気で俺が良いの？」

アリス「はい。／／／／」

うつうつうつん・・・どうしたもんか（悩）

アリスはかわいいし、綺麗でスタイルも良い、それに、俺のタイプでもある・・・

「・・・あのさ・・・アリスは、俺が神だとか気にならないのか？」

アリス「????気になりませんが・・・それが？」

嘘は言っていないな・・・

「・・・そうか・・・分かった。」

アリス「????」

キチンとアリスと向き合ってみるか！

・ 「アリスの気持ちは、分かった。俺もアリスの事可愛いと思うし・・・

アリスとの事真剣に考えてみるよ。」

アリス「ほんとですか？」

「ああ。ほんとだよ。」

この選択が正解だったのか・・・

17話

アレから、王妃たちと食事をするようになった・・・なのに・・・なぜ？

「王妃これは・・・どういこと？」

王妃「・・・いやなあ・・・貴族どもがうちの娘だけ、知り合う機会があるのは

おかしと言い出して・・・取り合えず、王族だけでと言う事になったのだ。

「・・・すまん。」

「・・・そういう事情なのはわかったが・・・

「それにしても・・・なぜみんな娘を連れてきている者ばかりなんだ？・・・」

王妃「それは・・・ユウ様が、面会時に恋人もしくは嫁探しと言ったのを聞いた

者たちがわが娘をと・・・送ってきた・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・マジで？・・・・・・・・」

王妃「マジだ・・・」

「・・・・・・・・（泣）・・・OTZ・・・」

王妃「まあ・・・これを取り切れば、後は断る事も出来るから頑張ってくれ。」

・・・なんかマジで泣きなくなってきたよ・・・

18話

ホント困った・・・

男として、この状態は喜んだ方が良いのは分かっている・・・

・・・しかしだー！！

「ココまで多いと・・・流石にイヤになってくるぞ・・・（泣）」

王妃「まあ・・・ざっと見ただけでも50人は居るな・・・」

王「選び放題じゃ。いいの～～～う・・・」

王妃・ユウ「うるさい！だまって（いてください）ろ。」

王「・・・（泣）OTZ」

「これ・・・全部紹介されて俺の身にもなってくれ・・・紹介されたものだけならまだしも・・・」

それに娘も居るんだぞ！50人どころではないだろ！1人に1人の娘とを考えても100人は居るん

だぞ！・・・しかも紹介されている間、お宅の娘のアリスは、ずっと腕から離れず・・・

仕舞には紹介者の連れとにらみ合ったり、言い争って居たんだぞ！少しは助ける！」

王妃「女の嫉妬やねたみは怖いじゃない・・・」

・・・○TZ・・・

おれの味方は居ないのか・・・（泣）

ポン

うん？

王「……頑張れ……」

だめ王にまで同情された……（泣）

王妃「それに、アリスの事は大目に見てあげて。本気であなたが好きなのよ……」

それは分かっている……これでも創造主だからな、相手がどんな人間で、どんな考えを

持っているか、いやでも分かってしまう。

「アリスの気持ちは、キチンと分かってる……」

王妃「そう・・・あの子の事よろしくね」

「まあ・・・悪いようにはしない。」

19話

その後・・・無事に拷問と言つ名の食事会を終わらせ、

部屋に帰り・・・寝たはずだ・・・

・・・確かに寝ていたんだ一人で・・・

・・・なぜココに・・・俺の布団にアリスがねているんだ???・・・

「おれ一人で寝たよな・・・」

・・・しかし、アリスは可愛いな・・・

・・・俺が好きって言うてくれて・・・心の綺麗だ・・・

このまま・・・アリスと添い遂げるのもいいな・・・

・・・もう少しこのままにいるか・・・

そうと、アリスを抱きしめもう一度寝に入った・・・

20話 食事会と言つ名のお見合い・・・番外 1（前書き）

王妃は、神を信仰してないわけではありません。

ただ・・・王妃は怖いです・・・最強です・・・

この世界は、エルフなど魔族が居る世界ですので、どんな能力を持つて

居るかは、もう少ししたら使う機会や誰が何の魔族か出てきます。

それまで待つてください。

20話 食事会と言つ名のお見合い・・・番外 1

私は、スズキ・ミナミ16歳

父は、スズキ・バルト 王の右腕・・・右大臣をやっています。

今日は、父に連れられ宮殿に来たんですが・・・これは完璧お見合い大会ですね・・・

父「今日来たのは、お前に何としてもあの方の恋人になって貰いたいからだ!」

「????あの方とはどなたですか?」

何処の誰とも分からない人と恋人になれなんて・・・有り得ないです!断固拒否です!

父「あの方とは、神だ！」

[illegible]

「? ? ? はあ ? ? ? ? ? ?」

父「神であるユウ様がこの世界に……この国に降りられたのだ。

しかも、この国に恋人もしくは嫁を探しにいられている……

それにアリス皇女がユウ様にゾッコンでアタックしているみたいでな

．．．それに、他の貴族や王族がこぞってユウ様に娘を嫁にと

画策しているのだよ」

・・・アリス皇女ですか・・・

「分かりましたわ！ユウ様がどんな方がどんな方が分かって良い方ならアタック

するでよろしいですか？！」

父「ああ。それで構わない。」

父「でもな・・・お前の嫌いなユリア嬢が乗り気で参戦しているぞ・・・」

あの馬鹿女が・・・

「あの女だけはいけませんわね・・・きっと阻止して見せますわ
！」

21話 番外2

私は、マツモト・ユリア16歳

父は、マツモト・サイト 王の左大臣職についていますわ。

いつもなら帰りが遅い父が、もう帰ってきて私を呼んでいるようなので

父の書斎に来ています。

トントン

「お父様、ユリアです。」

父「入れ。」

「失礼します。お呼びになられてとか。」

父「ふむ．．．実はな．．．．．かくかくしかじか．．．
．．．．．」

と言っわけでユウ様とのこと考えてみないか？」

神．．．ユウ様．．初めて神殿に行き自画像を拝見したとき感動して涙を流したのを

覚えていますわ。

「お父様．．ユウ様は．．．その．．自画像通りの方なのですか？」

父「自画像通り．．．イヤ．．それ以上の方だ！」

それ以上・・・

「分かりましたわ。私本気でユウ様の恋人になりたいですわ!」

父「そうか・・・でわ、今晚夕食会があるから準備をしときなさい。」

「わかりましたわ。」

父「・・・そういえば、右大臣の所の娘もくるみたいだぞ。」

・・・ミナミもくる・・・

「分かりました・・・」

ミナミには絶対負けませんわ!

22話 番外3（前書き）

最近・・・仕事が忙しいのでペースダウンしてます（>x< ;）

土日に書きますので、許して~~~~~！

22話 番外3

――アリス――

なぜこんな事になったのでしょうか・・・

私はユウ様をお母様に合わせて・・・あわよくば・・・う
ふふう

・・・はっ！・・・今何を考えていたのでしょうか・・・

話しは戻る事1時間前・・・

ユウ様の面会が終わってからしばらくたった頃・・・

お母様に呼ばれましたわ・・・何の用でしょう・・・

もしかして、ユウ様と結婚

「入りますわね。お母様」

王妃「入りなさい。」

「お母様何の御用ですか・もしかして、ユウ様と結婚できるとかで
すか」

王妃「んなわけないでしょう!」

「・・・ぶう~~~~~!」

王妃「いい加減にしないで！お仕置きしますよ！」

！！お仕置き~~~~~！！

「お母様！申し訳ござ居ません！」

王妃「はあ〓3・・・もう良いです。本題に入ります。

実は、ユウ様の恋人選びの事でな・・・「はい！私になり」
黙りなさい「はい。（泣）」

その事で王族や貴族の者たちがアリスだけ知り合う機会が多いのは不公平だと意見が

あつてな・・・それで・・・言いくいのだが・・・今日食事会を開いてそこで

娘達をユウ様に紹介する事になってしまった。」

「な・な・何だつて〜〜〜〜〜〜〜〜〜!」

[illegible]

22話 番外3（後書き）

もうすぐ女のバトルです！

女は怖いです（泣）

23話 番外終わり・・・ある意味修羅場・・・

ーーーーアリス視点ーーーー

いよいよ、ユウ様との食事会ですわ・・・果たして食事会と言つて良いのか・・・

「はぁ」

「何故こんなに居るのでしょうか・・・」

ザット見ても、100人以上の娘がいますわ・・・ユウ様に張り付いておかなくてわ！

アレから1時間後・・・

ユウ様に張り付いてだいぶたしますわ。

しかし、・・・みんな始めは気乗りじゃない様子だったのに、ユウ様を見てすぐ目の色を変えて・・・色目を使ってきましたわ！

・・・まあ・・・牽制してきましたけど

でも・・・今から来るあの2人は・・・曲者ですわ！！

バルト「始めまして、右大臣をしております。スズキ・バルトと言います。」

こっちは、娘のミナミです。もしよろしければ・・・」

サイト「バルト！ユウ様は自分で選ばれると言っていただろう！余計なことは言っな。」

「申し訳ございません。私は左大臣を勤めています、マツモト・サイトと言います

こっちは、娘のユリアです。」

ユリア「ユリアと言います。もしよろしければ、2人で・・・お話
しでも／＼／」

ミナミ「ユリアさん、抜け駆けはいけませんは！」

ユリア「抜け駆けなんてしてませんわ！」

ミナミ「どうだか・・・おとなしそうに見えて、何考えてるか・・・」

ユリア「何ですって！」

・・・睨みあっていますわ・・・この2人はいつも・・・

アリス「いい加減になさったらどうですか?! ミナミさん、キッチンとユウ様に自己紹介なさったら?」

これで、話しは反れましたわ・・・

ミナミ「そうでしたわ！私スズキ・ミナミといいますわ。これからユウ様よろしくお願いいたしますわ。」

ミナミ「それはそうと・・・アリス様は何故、ユウ様の腕につかまっているのですか？気分でも優れないのでしたら、どうぞお休みになられたら？私がユウ様のパートナーをいたしますから！」

アリス「なっ！・・・気分など悪くありませんわ！」

こうして永遠と1時間アリスとミナミとユリアの戦いがあったのだ
った・・・

ユウ「女は怖い・・・関わらないほうが良さそうだな・・・ほっと
居て王妃達のところでもいくか・・・」

24話 なんとまあ。。。 (前書き)

そろそろ、ペースダウンします。

修正しつつやるのでしません・・・

24話 なんとまあ。。

．．．．．ZZZZ．．．．．

．．．ん？．．．ん？何か騒がしい気が．．．

目を覚ますと．．．

．．．．．

アリスの顔が目の前に．．．しかも何か悶えてる？．．．

「おはよう。アリス．．．」

アリス「あっ！．．．あっ．．．の．．．その．．．」

?????

アリス「・・・・／／／／．．．」

取り合えず起きるか・・・

「そういえば、アリスは何で俺のベットに入り込んだんだ？」

アリス「／／／そっ．．それは、お母様達が．．．」

「・・・・王妃達が．．．」

あの王妃達ならなんでもやりそうだな・・・

アリス「でも、私は嬉しかったです／／だって．．．抱きしめてくださったんですもの／／」

「／／／／／／／／／／．．．．．まあ．．．．．なんだ．．．．．その．．．」

可愛かったからとは言えないよな／／／／／／／／／／」

アリス「／／／／／．．．可愛いだなんて／／／．．．」

?????もしかして声に出てた????

「／／／／／．．．えゝゝゝつと．．．．．取り合えず、今日は訓練所にでもいくか。」

アリス「私も一緒にして良いですか？」

「おう。いいぞ」

25話 迷子？

「おい。アリスはいるぞ。」

アリス「ユウ様……（泣）」

そう言つとイキナリマリアが抱きついてきた。

「????どうしたんだ？ アリス。」

侍女「申し訳御座いません。ユウ様、本日はアリス様に予定を言いましたら、やらないと

申されてまして……」

「……アリス。予定はちゃんとこなした方が良いぞ！」

アリス「そっ！のんな~~~~！」

こうしてアリスと一緒に訓練所に行くはずだったが、作法やいろんなお稽古があるとかで
執事や侍女達に無理やり連れて行かれた。

そして俺は　と云うと・・・

迷子？

アリスの侍女達に訓練所への道を聞いたんだが。

「ココはどこだ？」

「取り合えず人に会うまで歩いていくか。」

こうして俺は、行かなければ良かったと後で後悔するのだった。

26話

「あの、すみません。」

??「はい？」

とココがどの辺か訪ねようとした所・

??「つな！ ユウ様！」

俺のこと、知っているのか？

??「ユウ様がココに来てくださった。何と慈悲深き方だろう・」

「は？」

何か声をかけたらいけない人にかけてしまったみたいだな。

???「こうしては、居れません。神殿に参りましょう!」

「???????神殿?????」

???「そうです。あっ!!自己紹介がまででした。私は、神殿で巫女をしております

フジモト ミサキ といいます。この度は神殿にお越しく
ださしまして実に

ありがとうございます。」

こうして断ろうと思ったユウであったが、言えるような隙はなく無理やり連れて行かれるの

であつた。

「俺かみだよ……（泣）」

27話（前書き）

遅くなつてすいません。

仕事が忙しく、しかも夏ばてとダウンしました。

また、少しずつ書いていきます。

27話

なんだ？ この状況・・・

どんな状況かって？！

神殿に連れて行かれたかと思えば、たくさんの人 人 人

どうやら礼拝の儀式があるらしく みんな集まっていたらしい。

まあ ココまでは良いでしょう。

俺 イコール 神 といえば・・・

みんな俺見て泣き出す

拝む

好奇の目

欲情の目

どうやって取り入ろうかと考えている者

こういう時 神って不便。

考えている事がモロ分かり

まあ、俺に取り入ろうとしたり 弱みを握りたいとか出来るはずないのに

ご苦労な事で。

「はあ 3」

もう少ししたらココから出るか。

にしても、王や王妃に対して黒い感情を持つ影があるな・・・

一様 王達に忠告 しとくか。

27話（後書き）

もつすぐ、悪魔のような神が出た来ます。

28話 番外 もつひとつの世界

なあなあ〜。

ゼウス〜。そろそろもう一つぐらい世界を作ろうかと思うんだが・

どう思うっ？

ゼ「良いのではありませんか？」

「ほんとか？」

ゼ「ええ・・・ただし、いろいろ書類など増えますがそれでもよろしいですか？」

「ああ〜〜〜〜〜〜・・・ めんどくさいな。」

ゼ「まあ。少しぐらいなら手伝いますけど。」

「マジかー!! よっしゃ~~~~~」

こうして、新たな世界を作ることになったのであった。

そして・・・

ぜ「・・・手伝ったのは失敗だった・・・」

29話 悪しき者の企み

とある屋敷

??「神が降り立ってしまった。。。」

??女「そうみたいですわね。」

??「・・・このままだと、計画が狂ってしまつ。何とか修正しなくてはならぬなあ。」

??女「そんなに、狂わなくて済むかもしれませんよ!」

??「真か!」

??女「ええ。私が神の花嫁になり、虜にしてみえば・・・の計画は進むわ。」

もしかしたら、もっと早く事は進むかも知れませんわよ。
笑）
」

??「お主のその美貌と肉体で・・・」

??女「ええ。」

??「では、計画はそのまま進めておこう。お主が神に近づきやすいように手配しておこう。」

??女「では、計画通り・・・」

30話 どうしよう・・・

取り合えず、迷いに迷った・・・

段々 イライラ してきたので・・・

「どこでもドア~~~~~。」

・・・やっぱ・・・どこでもドアじゃあ締まんないな。

まあ、めんどくさいし いいつか。

「取り合えず、王の間」

カチャリ

「よお！」

王「っな！！ ユウ殿でしたか。」

「もしかして、驚かしてしまったか？」

王「そうですね……。いきなりドアができたので。」

「ごめんごめん。 いやゝゝ！ 迷子になってね。」

王「そうでしたか……。では、部屋に案内するものを「あ！ 話がある。」話ですか？」

「おう！ 王妃 と 左大臣 右大臣も呼んでくれ。」

王「左大臣と右大臣もですか？」

「おう。 今後のことだな……。」

王「それは、嫁「違うから」 違うんですか？」

「おう。この国に関わる事だ。」

王「わかりました。直ぐに手配します。」

31話　これからの事

「みんな集まってもらったのは・・・娘をもらって・・・」ちがうから・・・」

みんな何で娘を俺の嫁にしたがるかな・・・　はあ〓3

王妃「話というのは？」

「あゝ。　すまん考え事していた。」

「話というのは、怪しい動きがあるのでね。　信用できる人に今後を考えてもらおうと思って。」

王妃「怪しいごきですか・・・」

バルト「信用できるとは・・・私は感激です。　ユウ様に認めてもらえて（泣）」

サイト「私もであります。（泣）」

王「よかつたな」（泣）」

この状態は何だ???

正直 気持ち悪い・・・いい年こいた中年親父の男泣き。

一人ならそこまでないが、3人となると。。。

王妃「いい加減にしないで!!」

「はい!!」

さすが王妃だな。

しかし、右大臣も左大臣も王妃に頭が上がらないとは・・・王妃
恐るべし。

「話を戻していいか？」

王妃「申し訳ございません。続けてください。」

「怪しい動きというのは………」

32話

「怪しい動きというのは、どうも王座を狙うものがある。本来なら、狙おうと思っても

そう簡単にいかないものなんだが……。天界の者が関わっているのだ。」

王妃「天界のものですか！！ それは、ユウ様の敵ということですか？」

「いや……。違う。 敵ならそく抹殺出来る というか今の天界は平和だ。みんな充実していて

そんなこと考える必要がない。 奴は……。俺が人間の恋人を作るのが許せない……。いや、

あいつは自分以外が俺の恋人になるのが信じられないのかもしれないかもしれない……。」

あいつとは、一度 お・は・な・し （調教）が必要な！」

王妃・大臣・王 「「「・・・・・・・・・・」」」

「????んん? どうした？」

王「いや。声にでていた・・・」

「マジで!?!」

王「はい。」

まあいいや。

王妃「それより、その者達はどうしますか？」

「天界の者についてはこっちで処理するが、どうせならまとめて罫でもはるか？」

王妃「畏ですか？」

左大臣「それは？」

「んん？ ああゝ。畏か？ まあ・・・簡単ことだ!!」

33話

あいつをただ捕まえるのは簡単だ・・・

あいつが納得する方法を考えないとな。

「俺が、おとりになるか。もしくは結婚相手が見つかったと噂を立てるか。」

そうすれば直ぐに、あいつらは尻尾をだすだろう。」

王妃「噂ですか？ 噂を立てると後々大変なことになるのでわ？」

「大変なこと？」

王妃「ええ・・・。下手なものを選びますと、後々収集が付かなくなりすし。」

かと言って本当の相手をといいましても・・・まだ決まってい
のでしょっ?」

「ああゝゝゝ・・・確かにそれはありえるな。」

左大臣「王妃の言つと通りですな。 噂になつた者の親族が、ユウ
様を盾に強気に

出てくる者や王を蔑ろのする者、 国を乗っ取ろつとする者が出て
くるつでしよな。」

それも有り得るな・・・

「じゃあ、取り合えずこの話は保留で!」

「あつ!」

王「どうかしましたか?」

渡すの忘れてた。

「いや」。　忘れるとこだった。　これを王妃と王に・・・」

王「これは？」

「守護のペンダントだ。　奴らの狙いは、王と王妃だからな、それを付けてれば王達に

傷を付ける事も殺すことも出来ない。」

王妃「いいのですか？こんな高価な物。」

「俺が作ったものだから、いいぞ。」

王妃 王 大臣 「『作 っ た ！』」

「おう。これでも神だからな」

王妃「もう何も驚きません。ところでユウ様、ユウ様のお眼鏡にかなった方はいましたか？」

「ここでそれ聞くか・・・」

「まあ・・・いいかな〜っと思う子はいた。」

王妃「そうですか。」

「取り合えずこの話は、また明日。今日は解散」

そう言つて直ぐにデレポートして部屋に歸つた。

33話（後書き）

これから、ヤンデレかしていきます。

34話 なぜこんな事になった？（前書き）

次回R15になるかも？

どこまでがR15？

よくわからない・・・

34話 なぜこんな事になった？

あれから部屋に帰り、疲れてので侍女頼み風呂を沸かしてもらった。

フウ「3

「今日も疲れたな〜」。

風呂に入り、これからの事についていろいろ考えていた。

「何と言って、あの子に伝えたらいいのか・・・」

よく考えたら、今まで告白などした事もない。そもそも好きなコすらも出来た事がない

事にいまさら気づいた。

「告白されっる事は有っても、した事がないもんな〜。」

そう考えているときその頃・・・

アリス「それは、本当ですか？」

侍女「はい。先ほど王や大臣らと会談中に、結婚してもいいなと思える子が出来たと・・・」

アリス「そっ・・・そんな。」

侍女「アリス様！」

アリス「私は大丈夫です。・・・少し一人にしてください。」

侍女「しかし・・・」

アリス「お願いです・・・」

侍女「わかりました。」

パタン

侍女が部屋から出て行って1人になった。

「ユウ様私ではだめなのですか？　どうしても、私を好きになってくれるのですか？」

「どうしたら・・・」

「 1時間経過」

「諦めるしかないのでしょうか・・・」

「でも、本当に諦めれるの？」

「 2時間後」

侍女「姫様、お食事はどうされますか？」

「・・・そうよね・・・」

侍女「???姫様？」

「何？食事？ココで食べるわ。部屋へはこんで。」

侍女「はい。??」

「 3 時間後 」

「 既成事実を作ってしまったえば、ユウ様も私を愛してくれますわ。 」

「 きつと！そうよー！ 」

「 パツとでてきた。女なんか直ぐに忘れますわ 」 うふふふう・・・

「 きつとそうですわ。 」

「 頃ユウわ 」

ぞわあ

「 何だ今の寒気は・・・ 」

「 さっきお風呂に入って温まったはずなんだが・・・。 」

湯冷めでもしたか？今日はもう寝よう。アリスには明日告白しよう。

「

こうして噛み合わない二人の想いでした。

35話 ぶじじきょう (前書き)

R15です。

多分。。。。

35話 どうしましょう

何かお腹の上が重い・・・

そのせいで目が覚めた俺・・・そこには。

衣服を何も着けずにいるアリスがいた。

「なっ！！ 何しているんだ！」

アリス「何って。何するためですよ!？」

「なっ！」

アリスにいったい何があったんだ???

今朝までは、いつもと変わらなかったんだが。

「アリス落ち着こうな？」

アリス「私は落ち着いてますよ。」

どうする？ ！ ！ 俺 ！ ！

好きな女が裸で迫ってくるというのは、こんなに辛い物なのか・・・

「アリスどうして、こんな行動にでたんだい？」

アリス「え？？ だって結婚するんでしょう？ならいいじゃないですか。」

「結婚て？」

アリス「そんなの決まっているじゃないですか ¥¥¥¥」

決まっている？

何か可笑しいぞ。

俺は、明日アリスに告白するつもりだったはずだから、まだ告白も何もしてない。

アリス「そんな事より、早くお子を作りましょっ?！」

「アリス、チョツと待て。」

アリス「??? 何ですか?私じゃあ駄目なんですか?そんな・
・そんな・・・・

そんなのって・・・」

「アリス?」

アリス「絶えられない~~~~~!!!!!!そしたら一緒に死んで~~~~~」。

と言い襲い掛かってきた。

「アリス落ち着け! 結婚するんならマリアとするから!」

そう言った途端、暴れるのをやめた。

アリス「ほんと？」

「ああ。ホントだ！！」

「取り合えず話すから落ち着いてくれ。」

アリス「はい。わかりました。」

そう言って、裸のまま俺の大事などこの上に座るのだった。

「アリス取り合えずこれを羽織って。」

好きな女が裸で、あんなとこに座っているのもつらい

そう言うと、何の事か分からないのか。

自分の体を見て絶句したアリスだった。

36話 大変です。

「取り合えず、今回の事の説明をするぞ」

アリス「はい。」

「どこで嫁の話を聞いたんだ？」

アリス「それは、もちろん侍女に盗み聞きさせたんです。」

おいおい・・・大丈夫か？

侍女が盗み聞きできるほどに、警備がなっていないのか？

「盗み聞きはよくないぞ！」

アリス「はい・・・ごめんなさい。」

「反省していればいいんだ。盗み聞きするぐらいなら、俺に聞けばよかったんだ。」

「今度からそうしなさい。」

アリス「はい。」

「まあ。それはいいとして・・・今回王妃達と話していたのには他でもない。

邪な考えのモノがいてな。それについて話していたんだ。」

アリス「そうなのですか・・・でも、そこでなんで嫁の話しが？」

言っても大丈夫なのか？

さっきの状況から見て、いったら駄目な気がするの・・・気のせいかな？

アリス「言えない事なのですか？」（涙目）

その顔は・・・卑怯だろ！！

もしかして、俺の理性を試してるのか？

そうなのか???

「いや・・・言いにくいんだが、その王妃達に邪な考えをしている者の近くに

天界の者が協力しているんだよ・・・。」

アリス「そうなのですか。」

「ああ・・・そうなんだよ。」

よし、これで終われるぞ。

アリス「だからといって、何故嫁なのですか??もしかして・・・おんなですか??」

話をそられなかった~~~~~!!

「え~~~~~と・・・そのだな」

アリス「そうなのですね!??」

観念するしかないな。

「そうなんだ。あいつは、自分が俺の嫁に相應しいと思い込んでいてな・・・」

何度も断ったし・・・まず、タイプじゃないしな。」

アリス「・・・ぶつぶつ・・・ぶつぶつ・・・」

「アリスどうしたんだ?？」

様子がおかしいぞ?？
怖くなつたのか?

「アリツ「敵・・・」」

???

アリス「私の敵ですね！ ユウ様と私の愛に入り込もうなんて！！
殺す・・・」

「アリス?？」

アリス「安心して下さい！ 私達の愛に入り込めませんわ！そう
ですわよね?!！」

「ああ・・・そうだな・・・」

なんだ??この気迫は。
取り合えず、落ち着かせるためにねるか。

「もう、夜も遅いしねるか。」

アリス「はい」

「???アリスは自分の部屋で寝るんだぞ。」

アリス「嫌です！一緒にいいです・・・駄目ですか???」(涙目)
ウルウル

・・・だめだ・・・

「わっ・・・わかった。」

アリス「やった~~~~」

こうして、一緒に寝ることになったのだが。
もろもろ、明日後悔するのであつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0589m/>

神様の頂点～創造主になってしまった少年～

2011年7月24日12時44分発行